

# 児童養護施設で育った女性の母性意識の形成プロセスとその課題

渡辺暁里

国際基督教大学カウンセリングセンター、四谷ゆいクリニック多文化外来

## <要 旨>

幼少期のトラウマ体験が、世代間を連鎖して影響することが臨床現場で認識されて久しく、先行研究では、児童虐待を受けた人は一般集団に比べて子育てに困難を感じやすいことが指摘されているが、児童虐待を受けた女性が母親になることにどんな思いや価値観を抱いているのか、さらにはいかにして母親になる選択をするのかの研究は少ない。児童養護施設で育つ女性はその母性意識の発達にどのような課題を持つのかをライフヒストリー法を用いて分析した結果、両極に位置する母性理念と母親自覚への不安を揺れ動きながら母性意識を形成しているプロセスがわかった。そして、揺れ動くプロセスを母性意識へ促進する要因として、肯定的ロールモデルの獲得、新しいアイデンティティの確立、肯定的自己観の獲得、支援者とのつながりがあり、それらが母親自覚への不安に現実検討を促し、母性意識が形成されていると考えられた。また、妊娠・分娩・育児への社会的サポートの欠如や、男性関係の維持発展の困難や結婚願望の欠如が現実問題として語られ、長期的なメンタルヘルスや対人関係支援の必要性と重要性が浮き彫りになった。

## <キーワード> 児童養護施設 児童虐待 母性 ライフヒストリー

### 【はじめに】

近年女性の高学歴・晩婚化などに伴い、わが国の少子化傾向がますます加速する中、子育て支援や不妊治療支援など、少子化を食い止める政策が次々と考案されている。子どもは授かるものからつくるものへの意識の変化に伴い、女性が子どもを「産む・産まない」の選択はきわめて個人的、心理的な問題へと移行している。

一方、2011年に児童相談所が対応した虐待件数は過去最多の44,210件であり、児童虐待は深刻な社会問題となっている。今日、家庭で暮らすことができない子どもを国が保護養育する「社会的養護」を必要とする児童の6割が被虐待児とされる。幼少期のトラウマ体験が、世代間を連鎖して影響することが臨床現場で認識されて久しく、諸外国の先行研究では、児童虐待を受けた人は一般集団に比べて子育てに困難を感じやすいことが指摘されている。しかし、児童虐待を受けた女性が母親になることにどんな思いや価値観を抱いているのか、さらにはいかにして母親になる選択をするのかの研究は少ない。

2004年児童福祉法改正により、児童養護施設退所者のアフターケアが施設に課されるようになったが、実際には人的資源や財政面などで多くの課題があり、支援体制は十分だと言えない。全国社会福祉協議会児童福祉部が2008年度に

実施した「社会的養護を必要とする児童の発達・養育過程におけるケアと自立支援の拡充のための調査研究事業」は、児童養護施設の退所者(12施設、30名)へのインタビューを通して、孤立感や孤独感を体験している退所者の姿を明らかにしている。また2006年の子どもの虹研修センターによる「児童虐待における援助目標と援助の評価に関する研究—情緒障害児短期治療施設におけるアフターフォローと退所後の児童の状況に関する研究—」によれば、女子退所者の有配偶者率、離別者率、そして挙子率は同年代の女子と比較すると高く、社会一般の晩婚化が進む中で、情緒障害児短期治療施設退所者女性の早婚・早出産化が指摘されている。

大日向(1990)は、母親意識は「生理的・生物的次元」「社会的・文化的次元」「個の次元」の三つのレベルに起る様々な要因が影響しあって発達することを述べている。そして、母性は従来の絶対的、普遍的のではなく、流動的で発達変容していくものであることを明らかにしている。さらに花沢(2005)は、母親になることや母親であることの自覚を「母親自覚」、妊娠・分娩・育児への態度や価値観を「母性理念」と定義し、「母性意識」はその二つを包括した概念だとする。そして母性理念は、幼児期からの生育体験を基に文化や社

会の影響をうけながら形成され変容すると述べている。本研究では、花沢の定義に基づき母性理念、母親自覚、母性意識を捉え、子ども時代に（母）親との関係において様々な心理的喪失・損傷体験をした女性は、自らどのように母親になる選択をしていくのを考える。

### 【研究目的と意義】

児童養護施設で成長した女性はその母性意識の発達にどのような課題を持つのか、さらには被虐待経験を持つ人はどうなのかが研究関心の中心である。児童養護施設の退所者は、退所後の動向を把握しにくく、支援需要が認識されている半面実際には支援を受給していない。本研究は、児童養護施設で育った女性の母性理念と母親自覚とは何かを明らかにし、母性意識形成における心理社会的課題を理解することを目的とする。児童養護施設で生活した女性の多くは、何らかの被虐待体験をもっていると推測できる。また、子ども時代の喪失体験、孤立体験もあると思われる。その生育状況のなかで、どう母性意識を育てていくのかがこの研究の焦点である。被虐待体験の聴取は、本研究の目的ではない。

社会福祉学の立場から児童虐待と母性の問題に取り組むことは、転換期にある社会的養護の支援方法や内容の充実のために重要である。さらに、すでに母親になった女性ではなくこれから子どもを産む産まないを選択していく女性を研究対象にすることも、母性を扱う研究分野では未来志向的な獨創性あるアプローチであると考えられる。

### 【研究対象と方法】

本研究の対象者は、未婚既婚を問わず児童養護施設を退所した18歳以上30歳代の子どもにいない女性である。先行研究の知見から、母性の形成と女性の生育経験には関連性があることが明らかになっているため、研究方法はライフヒストリー法を選択した。対象者は児童養護施設からの紹介や当事者団体などを通じて協力者を抽出し、5名にインタビューを行った。協力者には、研究の目的や方法、匿名性、任意性、研究結果の公表などに関して口頭と文書で詳しく説明した上で、同意書に署名を求めた。過去の体験を思い出すことで心が一時不安定になる可能性を配慮し、「いま、ここで」話せることと話したいことだけに限った内容で良いことと、途中でインタビューを中止できること、必要があれば研究者にいつでも連絡を取れることを伝えた。万が一トラウマが蘇ってきて情緒不安に

なった場合は、研究者の勤める精神科クリニックの医師につなぐ態勢も用意した。数名には複数回インタビューを行った。インタビューは逐語データに変換し、キーワードやキーコンセプトを基にコーディングをし分析した。紙面の都合上、本稿では3名のライフヒストリーを提示する。本人が特定できないよう個人情報は改変し、掲載する3名については本人に原稿を読んでもらいた了承を得た。

### 【結果】児童養護施設で育った女性のライフヒストリーと母になることへの思い

#### 1. Aさん

きれいに化粧を施し、明るく手入れされた髪型の似合うAさんは、30代既婚女性。前向きな明るさと意思の強さが印象的である。幼児期から18歳までを大舎制児童養護施設で生活した。

#### 負の自己観

「(施設で育った子は)一般家庭の子たちに対しての、自分とのギャップがありすぎて、すごいコンプレックスで悩んでいる」と言うAさんは、自分も「施設の子はっていう風に見られちゃいけないと思って、(中略)緊張状態っていうか、すごい自分がテンション高いときは日常で多い」と語った。「普通じゃない」感覚を生み出す児童養護施設での体験について、「一般家庭」で行われる多様な経験の圧倒的な欠如と、環境の差による生活体験の違いの問題が大きいと、Aさんは指摘する。例えばお墓参りの仕方や複雑な人間関係を含む親戚との付き合い方など、大舎システムの中では体験できない生活文化の伝承が欠落している。また、家計管理や家事の仕方など自立に必要な生活知識と経験不足に加え、施設特有の方法に慣れてきた医療機関の受診方法や買い物の仕方などは、社会に出てからその差異に適応できずに苦労する退所者が多いと言う。

さらに、施設外の社会とのかかわりの中で、好奇・憐憫の視線、偏見、差別を受けた体験から、「施設の子」というレッテルを貼られた自分に対して強いコンプレックスを抱くようになったとも語った。Aさんには、就学前のある秋の日のことが今でも鮮明に思い出される。施設内に外部から幼稚園の子どもが収穫した野菜を持ってやってきた。「向こうは、幼稚園のかわいらしい制服を着ていて、でも、当然(こちらは)<sup>研究者付記</sup>施設だから、みんなこうきつない格好なんですよ」「子どもながらに嫌だ、要らないって

思っちゃって。(中略)自分がどうしても、人間的に、こう下の方の、なのかなってというのは感じざるを得ない」と語るように、施設生活の中で「恵んでもらう」感覚や善意の押し付けを感じ、負の自己観が積み重なっていった。「そんなに悪いことするんだったら、施設に入れちゃうよ」「施設の子だから、手を上げられるかもしれない」などのコメントを聞くたびに、「私、おかしいのかな」という自分への不信感が募っていった。

### 出自を知る

Aさんの人生の転機の一つは、初めて自分の入所の状況を理解したときだった。18歳の退所を間近にして、一番親しい職員に自ら自分の過去を尋ねた。その職員は現在のAさんに「母親ってこういうものなんだな」とのイメージを抱かせる女性で、個人的にも仕事の面でも長年彼女の大きな支えになってきた。真実告知は、「何かのついでにさらっと」起こった。「私、非嫡出児だったから、経済的にもう子育て無理ですって言って手放したと思っていたんですけど、(入所の本当の理由は)ネグレクトだったって。(中略)何だ?ネグレクトって思ったら、それ養育放棄のことなんだって思って。そこで初めて、ああ、私、捨てられた?とって。(中略)それまでは、きっとお母さんも大変で、自分の生活立て直すのが大変で、いつか迎えにくるだろうっていうふうに、ちょっと淡い期待を抱いていたんですけど」とその衝撃を語った。その数年後、またもや偶発的に他の職員から、「おまえが施設に入ってきたときのこと聞きたいか」と尋ねられた。「なんでこのタイミング?と思ったんですけど。でも、なかなか聞く機会がないと思ったから聞いたら、私たち兄弟を置いていくときに、母親は『もう、金輪際この子たちと関わることはないから、里子に出すなり、養子に出すなりしてください』っていう風に言ってきたんだって言われて。」「どっかでは、やっぱり(母を)研究者付記探したいなって思いはあった」が、「再会とかいうことも、ああ、もうないんだなって思って。(中略)もうそういう期待を持つのはやめよう。もう母親と私はまったく別。もう変な期待をするのはやめよう」と思うようになった。「その日は眠れなかったですね。動揺しちゃって。分かってはいたけれど」と、その告知がいかに衝撃的な出来事だったかを振り返った。「私は、そういうふうにさらっと言ってもらって動揺はしたけれど、今はもう、こう、やっともやもやしていた思いがクリアになったってのがあって」と事実を知り、理

解したことを今ではプラスに捉えている。「自分のことが何も分からないっていうのは、本当に、こう、漠然とした不安がある」と、それ以前の不安定な自己観を回想した。

### 自分に根っこが生えた結婚

自分の入所理由を知った時の動揺は、結婚していたことで救われたという。「自分がいまの旦那さんの姓を名のるようになって、こう、やっとなんか自分に根っこが生えたっていう安心感があった。(中略)自分が選んで、〇〇〇(Aさんの現在の名)になって、もう私はここがゼロスタートだっていう感じがしたので。(結婚は)研究新付記自分が選んで、全部選択して作ってきたものだけど、もう〇〇〇(Aさんの旧姓)はどうしようもなかったじゃないですか。自分には、どうしようもなかったっていうことで、こう、何ていうんですかね、別れたっていうか、きっちり。(中略)やっとなんか自信が持てる。安心がありました。」「だから、やっぱり結婚した方がいいですね。どうでもよくなる、根っこことか。(中略)まったく別人になっちゃった感じはしますよね。」

### 生き証人がいてほしい

Aさんの自己確立に欠かせない要因は、児童養護施設時代から彼女を知っている人たちとの関係性の継続であった。「自分がちっちゃい時からを知ってくれる人を自分から探しにいかないと得られないっていうのは、なんかちょっと寂しいですね。本来だったら、こっちが自分のちっちゃいころの記憶を探しにいかずとも、生き証人が一番身近にいて。なんか、そんなことすら、私たちには当たり前でないじゃないですか。」「そう、2年ぶりにあって、『面影あるねえ』の一言でもいいと思うんですよ。『変わってないね』とか。(中略)そういうのを家族から得られないっていうのは、非常に、なんか人生にぼっかり穴あいちやうから。つらいなあと思いますよね。」

### 母であること：こどもの絶対味方、濃いつながり

Aさんは年齢的にも妊娠出産を考えている。母親になったら、子どもにとって「絶対味方」の存在でいたい。「私が今まで思っていた不安を、感じなくていいようにはしてあげる。孤独感っていうか。(中略)なんか、絶対に、こう、守られている安心感っていうのは、もう絶対与えてあげたいなって思って」と語るAさん。

「休日のショッピングモールにいる家族みた

いのは、もう、すごい憧れる」と言う A さんは父は外勤で母は主婦といった核家族の「一般家庭」のイメージを強く憧憬してきた。そして「(誕生日、クリスマス、正月といった年中行事を) 研究者付記ひとつひとつ家族単位でやるっていうことが、もうすごい憧れ」と言う。「(本来子どもとして両親のもとで暮らしたかったが) 研究者付記それがかなわなかったから、じゃあ母親になってその家族をつくっていきけるっていう期待がすごいある」と語り、血のつながりによって結ばれる家族像への思い入れを話した。血のつながりがあるって初めて家族が成立すると考える A さんは、自立してからもより濃いつながりが継続するような気がするので、生まれてくる子は女の子を希望するのだと言う。

### 「愛の『さじ加減』がわからない」

同時に、愛情の「さじ加減」がわからないと不安を口にした。「母親のモデルがなかった分、すごく不安に思ったりしますね」「私おかしいかなっていうのを、ずっと考えて生きてきたっていうのがあって。だから子どもにそれをやっちゃいそう」と話した。与えすぎるのではというのと、逆に与えられないのではという不安もある。「与えてあげたい、やってあげたいとは思っているんですけど、なんか、たぶん、自分の子どもを見て、この子は私が欲しくても得られなかった、一般的な生活を得ていくんだろうなって思ったら、そのことに、こう、嫉妬する」ような「醜い心が出てきちゃいそう」不安があるとも言う。ただ、母親のように慕っている女性や夫の家族などをモデルにしながら、「こういうふう子育てしようじゃないけど、ちょっと自信がついた」とも話した。同時に、将来生まれる子どもが、「社会的養護の当事者が子どもを産んだ」という好奇や偏見のまなざしを向けられたら嫌だとも危惧している。

## 2. B さん

B さんは、30 代前半未婚女性。物腰も語り口もゆったりと穏やかで、初対面の緊張感を一瞬にして和ませてしまうような優しい笑顔を湛えている女性である。

B さんが生まれて 1 年後に両親は離婚し、B さんは母子寮などで母親に育てられていた。しかし、B さんが 6 歳のとき母親は病気により 30 代で死亡した。その後、父親に一時引き取られたものの、児童相談所の介入と保護を経て大舎制の児童養護施設に入所し、18 歳まで生活した。

「丸く済むんなら、もう、いっくらでも謝る」

B さんは、児童養護施設を退所して間もない 19 歳で脳腫瘍を発症した。今までに症例のない腫瘍とのことで、原因はストレスと断定され緊急に手術が行われたという。およそ 12 時間を要した手術後は、1 週間の ICU 入院と長く苦しいリハビリ生活が待っていた。手術室に入る前の恐怖心と、麻酔が覚めたときに「ああ、生きててよかった」と思ったことを、「いつも忘れてたらいけない」と心に刻む B さん。なぜなら、そこが、「自分を変えていこうと思った」と自分を振り返る新しいスタートになったからである。彼女を死の淵まで追いやったストレスとは一体なんだったのか。彼女は次のように理解している。

B さんにとっての 10 年強の児童養護施設の生活は、「やっぱり職員の言うことは絶対。職員の言うことに、どんなに不満を持って、職員が言ってるから、私が間違ってるんだぐらいの。(中略)もう、自分が悪いんだから、自分が謝っとならば、もうそれで丸く済むんなら、もう、いっくらでも謝ればみたい」己をひたすら我慢し押し殺し続けた日々だった。「反抗期がなかったというより、反抗できなかった」生活で、「うん、うんって笑って聞いて、我慢して。でも、ひそかに布団の中で結構泣いたことっていっぱいあった」と振り返るように、彼女は抵抗できない上下関係の中で、本来の自分を押し殺し表面的になんとか問題を回避することで生き延びてきた。そんな自分のあり方に終止符を打ったターニングポイントが、脳腫瘍発症であったのだ。

### 「言いたいことは言おう」

「(退院後、通常の生活に戻ったときに) 不思議と、自分のやっぱり嫌なことは嫌とか、おかしいと思うことは言わないと、自分が苦しいだけなんだって、不思議とって。」「もう殴られても、もういいやって。自分の言いたいことは、なんか、言おうって思えるようになった」と言う。「職員の言うことが絶対って思うんじゃないって、職員に対して、おかしいと思うことがあれば言わないといけないっていうか、言う権利もあるし。(中略)私が偉そうに語るわけじゃないんですけど、資格をもっているから、職員だから、その、言っていることが全て正しいわけじゃないと思うんですね。やっぱり人間、その前に人間だから。」と、それまでの生活とは対照的な人間観と自己像を抱くようになったようだ。

### 「自分の中のお母さん」

そんな B さんには「20 歳のときに出会った自分の中のお母さん」という女性の存在がある。

職場の先輩として B さんを支え、B さんが自分の中に鬱積した気持ちを吐き出させようとしてくれる人だった。「怒ることも大事なんだよ」って教えてくれたその女性とは、今でも時折電話で悩みを打ち明けたり、時にはけんかのできる関係へと発展してきた。

#### 昔の仲間と会う：懐かしさと嬉しさ

「やっぱり、誰を頼るかなんだらうなって思う」と、おもむろに退所後の生活を振り返り指摘した。B さん自身は、施設職員や友人を頼れなかったと言う。それは、退所後には施設を頼るべきじゃないと「勝手に思い込んでた」からだった。しかし、昨年初めて参加した児童養護施設の同窓会で仲間と十何年振りで再会し、「『あ、ブンブン (B さんのあだ名) さんだ!』って言ってわあって来てくれたので。(中略) やっぱり嬉しかったですね。」と感懐を述べた。昔の面影そのままの仲間と再会できた懐かしさと嬉しさはひとしおだったという。そして、B さんの子ども時代を知っている施設職員と四方山話に花が咲き、初めて大人同士で会話ができたことも大事な体験だった。

#### 母：「私の中ではほんとと素敵な女性」

20 代は結婚願望が強かったと言う B さんは、母親の死亡年齢に近づいた 30 歳前後に、結婚や子どもを持つことについて真剣に考えた時期があったと振り返る。20 代後半、偶然に親戚のおじさんから施設入所前後の状況を聞かされたことがあった。両親は B さんが誕生して 1 年後に離婚をしたが、実はその後も父親は母親に何度も金をせびりにやって来ていたという。おじからの突然の告白に、施設入所前の父親との生活の遠い記憶が思い出された。母の他界後、定職のない父とともに公園や安宿を転々としながら生活していた時期があった。裸電球ひとつのみの空き家に寝泊りしたことも。支給されるお小遣いをもらいに、自分の生活する施設までやって来た父。おじの話に「ああ、お父さんやっぱり」とため息がもれた。一方で、母親の強さをあらためてこころに刻むようになったと語った。「私のお母さんに対する思いが、その強さだったり、弱かったり。私の中では、ほんとと素敵な女性だと思ったんですよ。(中略)ほんとに何にも弱音はかななかったんですね。常に、何か自分ひとりでも解決しようとしてたっていうか、我慢強さっていうか、で、一生懸命この子を守っていくんだっていう強さ、ほんとに。」

子育て：「自分の子どもも児童養護施設に行くの

か」「自分はまだ頼りない」

「自分が子どもを持ったとき、かわいいだらうなと思うし、たぶんすごいかわいがり過ぎる」と夢を語り、大好きないわさきちひろの母子像を理想として部屋に飾っていると話す B さんは、その一方、母親の強さに比べたら「自分はまだ頼りない」という思いがあり、子どもを「ちゃんと育てられるのか」「お母さんみたいな強い生き方できるかな」と自信がない。「もし自分が病気になって何かあったときに、身の回りで面倒を見てくれる当てがない。そうしたら自分の子どもも児童養護施設に行くのか」と子育てサポート基盤の弱さへの不安も大きい。

「でもやっぱり、そもそもその子どもを産むまえに結婚があると思うんですけど。(中略) 本音でほんとに話すと、やっぱりお父さんのことが自分の中でトラウマなんです」と、結婚そのものに幻滅していることを打ち明けた。それは父親の行動に起因する要因が大きいですが、同時に、実際交際した男性から言葉の暴力を受けた体験から、「男の人に対して、付き合うとか一緒にいたいと思う気持ちがない」という現状がある。父親との生活や過去の交際経験から、「自分がもし結婚したときに、お母さんと全く同じことになっちゃうんじゃないかという不安がある」とも語った。

#### 3. C さん

C さんは、あどけなさの残る 20 代未婚女性。優しい表情からは想像し難い強い意志を含んだ、はっきりと語る口調が印象的だった。「だいぶ落ち着いた」と自分の生き立ちを淡々と語る C さんは、地方で生まれ育ったが、小学生で両親が離婚をしたのを機に母の実家のある東京に来た。母親は自身の被虐待体験によって、身体障害と精神障害を患っていた。障害のある母親と祖母との同居生活は、経済的に困窮を極めた。その上、複数回にわたる母の自殺未遂。中学生で父親の元に戻るも、再婚相手である継母からの暴力に遭う。転校した中学でもいじめの対象になった。助けを求めた中学校の教員から裏切られ、大人への不信が募っていった。東京の母親にも相談したが、埒が明かなかった。

#### 「新しい自分が分かってきた」

父と継母との生活のなかで、日々悪化するストレスに耐えられず、ある日自殺をするつもりでマンションの屋上へ。そこで同じマンションに住む友人に偶然に救われ、結果的に自ら児童養護施設への入所を希望し、中・高校時代をグループホームで生活した。「天国だった」と表現

するグループホームでの生活では、自分の生い立ちや家族の問題への気持ちが落ち着いたと言う。失望の続いていた両親と物理的に離れた生活の中で、「意外と子ども好き」な自分を発見したり、寮の職員との信頼関係が徐々に構築されていき、「新しい自分が分かってきた」のはこの時期だった。教師ら大人への不信感も、少しずつ改善されていった。

絶望の淵をさまよい死に向かって歩いていたCさんを止めてくれたのは、同じマンションに住む幼馴染だった。「寮に引き取られた後に、夜むんむんとして考えたことは、あそこで私は死んでたわけだから、(中略)何かが変わったのかなって思ってた。(中略)その時の瞬間ってというか、その体験、後から何度も何度も、目が覚めているときも夢を見ているときにも、やっぱりどこかで必ずよみがえってくる。その時の体験が、やっぱりある意味一つの新たな始まりだったのかなあ」と振り返った。一時は死に向かって自分を振り返り、「結果は自分の意志だと思ってる。自分が他人からどうこう言われて、決断して、行動して、後悔するよりも、自分で決断して、行動して、後悔した方が何分に気持ちが違うなと思った」と語った。

「母親のしてくれることは決して『当たり前』のことではない」

小学生の頃、母親の生い立ちや虐待の体験を伝えられた。きちんと理解できるまでには時間がかかったが、母親の子ども時代を知ることで、母親がしてくれることが「(母親としての) 研究者付当たり前じゃない」と思えるようになったという。過去を知ることで心理的に辛くなったのも事実だが、自分の存在やどう育てられてきたのかを意識的に考えるようになったため「すごいよかった」と言う。

「大丈夫、大丈夫」

苦しみから前を向く力を見つけ、しっかりと自立して生活しているCさんだが、時々自分でコントロールできないほど感情的になるという。ただ、長年交際してきた彼氏が彼女の生い立ちを全て知り、「大丈夫、大丈夫」と精神的に不安定になる彼女を全面的に支えてくれていると語る。大会社に勤め自立した生活を送るCさんにとって、彼氏は一番よき理解者と支援者である。

「子どもの人生を遮るようなことはしたくない」

ずっと「私は夢ってというか、欲しいものは

家族だった。(中略)でも今は揺れている感じです」と語るCさんは、「絶対自分の母親・父親がしてきたこと(中略)は絶対しない」、つまり「子どもの人生を遮るようなこと」はしないと強く決意している。だから逆に「この子には絶対自由があって、未来があって、自分の考えがあるはずだから、それを尊重しよう」と心に決めている。「母親の権利を、権力を、子どもにこういうふうにするような親になりたくなくて」と話した。

しかし、自分が受けた傷を子どもには受けさせたくないという一方で、「精神的なバランスが悪いから、いつ子どもに同じことを、されたことをしちゃうんじゃないか。(中略)カッとなってたたいたり」傷つけてしてしまうのではないかと不安があるのも事実だと言う。さらには、妊娠出産に関する体の変化、そして出産に伴う痛みが怖い。その身体的痛み、精神的に耐えられるかが怖いと感じていた。

### 【考察】

#### 1. 母性意識の形成プロセス

Aさんは出自の真実を知ること、自分が求められた子どもでなかったことが分かり強い負の自己観と対峙している。「施設の子」という社会的差別や偏見により、負の自己観はさらに固定化し強い不安感を生み出していた。Bさんもふがいない父とそれに対決して自分を守った母を知り、「私の中では、ほんと素敵女性」と母を捉えている、一方それだけに「自分はまだ頼りない」と思い、「ちゃんと育てられるのか」自信がなく、自分に育てられる子どもは「やはり、児童養護施設に行くのか」と考えてしまう。Cさんも障害を抱えながら苦勞して子育てをした母の歴史を知り、母の育児が母にとっては「決して『当たり前』のことではない」という思いに至る。しかし、傷つけられた一連の体験から、

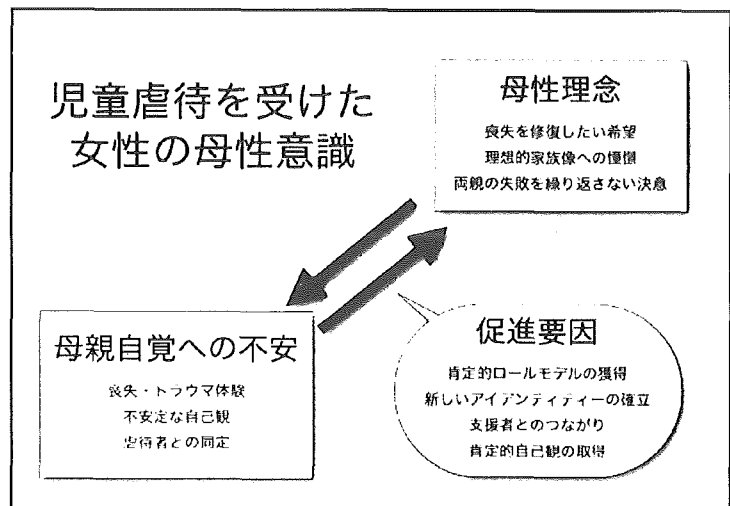


図1：児童虐待を受けた女性の母性意識形成プロセス

Cさんは「大人は大嫌い」というネガティブな人間観も持っていた。

結婚し母になることに関しては、Aさんは「自分に根っこが生える」ことであり、「子どもの絶対味方」である母親になりたいと希望し、「濃いつながり」を得ることに期待を寄せている。Bさんはアンビバレントな気持ちを持っているが、「20歳のときに出会った自分のお母さん」という母性のロールモデルを発見している。そして親しい人たちと出会える「懐かしさと嬉しさ」を感じ、それが家族的絆であることを知っている。しかし母親になる夢を抱き子どもはかわいいと思っけていても、結婚相手との不和により結果子どもが児童養護施設に入所してしまうのではと不安も持っている。Cさんは、「欲しいものは家族だった」という思い、自分の被虐待体験から「子どもの人生を遮るようなことはしたくない」という強い決意を抱いているが、自分がされたように衝動的にカッとなったら子どもを傷つけてしまうのではないかという不安にも支配されている。ただ「大丈夫、大丈夫」と言ってくれる彼氏の存在がそれを乗り越えさせてくれるかもしれない。

概して、協力者の語る母性理念は、「強いつながり」「絶対味方」「一体感」といった自分の子ども時代の喪失・損傷体験を修復したいという希望、理想的家族像への憧憬、自分の両親が犯した失敗は「絶対しない」という決意であることが分かった。対極に位置する不安は母親自覚に関するもので、Aさんの語るように「愛情の『さじ加減』が分からない」という自らの喪失体験、Bさんの言うように強くわが子を守れないかもしれないという自信のなさ、Cさんが懸念するように「自分がされたこと」を子どもにしてしまうのではないかという虐待者との同一視に起因するものだと言える。協力者たちは、両極に位置する母性理念と母親自覚への不安を揺れ動きながら、母性意識を形成していることがうかがえた。そして、母親自覚への不安は、喪失に始まり、差別・偏見・いじめといったその後の被害体験の中で固定化したマイナスの自己観とも大きく関係していた。揺れ動くプロセスを母性意識へ促進する要因として、結婚相手の家族や「20歳のときに出会った自分の中のお母さん」という肯定的ロールモデルの獲得、出自を知り過去と向き合う中で確立した新しいアイデンティティ、「言いたいことは言おう」という肯定的自己観の獲得、「生き証人」としての支援者とのつながりがあり、それらが母親自覚への不安に現実検討を促し、母性意識が形成されていると考えられた(図1参照)。

## 2. 妊娠・分娩・育児への社会的サポートの欠如

妊娠・出産・育児に関する知識不足や気軽に相談できる場所の欠如が不安として語られた。Aさんは、多くの施設出身者にとって「里帰り出産する場所がない」ことを訴え、Bさんは、子どもが熱を出したとしても、退所した施設に行き「『始めまして』から説明しなくては行けなかったら相談できない」のでは行きにくいと指摘する。「ずっと関わってくれた保母さんがひとりでもいるっていうのがいい」というように、妊娠・出産・育児のプロセスの継続したサポートが安心につながる話が話された。

また、サポートを適切に活用することへの不安(「肝心なときに助けてって言えない)、妊娠・出産の身体的変化への不安(「痛みが怖い)なども挙げられた。特に妊娠・出産・育児に関する医療や保健福祉サービスに関する情報についても大きなニーズが認められた。一旦施設を退所すると、折々の連絡はしていたとしても「迷惑をかけては申し訳ない」との遠慮が邪魔をしたり、真に個人的な相談はしにくいという心情も話された。

## 3. 対人関係問題

さらには、妊娠・出産に至る前段階における現実的問題として、性行為の困難、恋人とのDV関係、パートナーと呼べる男性がいない、結婚願望の欠如などが語られた。とりわけ、「人を信用できない人間なので、ちゃんと恋愛することが難しい」というように対人関係における不信感が強く恋愛関係に入れない、「(男性との交際が)研究者吹き決して長続きしない」などパートナーとの関係を健康的に発展させることが難しいといった、子育ての基盤となる親密な関係における不安や葛藤、喧嘩やトラブルへの対処などに苦慮していた。

## 4. 米国ニューヨーク州児童養護施設の視察

2012年研究者はNY市の児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、そして自立援助ホームを視察訪問した。そこでは従来の個人心理療法、グループ心理療法、家族療法に加え、入所児童のトラウマ体験からの回復のため、施設環境や組織文化そのものを変えていこうというトラウマ研究の知見に基づいた治療モデル(Sanctuary Model)を導入していた。身体的、心理的外傷を負った被虐待児との仕事を通じて職員が負う精神的ストレスを認め、それが不用意に被害者を非難することや、彼らの過去のトラウマの再現につながらないよう、職員自

身へのサポートも含めた治療的アプローチである。入所児童間の暴力、施設職員から児童への虐待、高い離職率などが問題となる社会的養護施設において、トラウマという軸で入所児童と職員双方の体験を理解し、暴力に晒されトラウマを受けた子どもたちに対して、権力の行使によらない安全な環境を構築しようとする興味深い方法である。

さらに、施設を退所した若者がホームレスになることを予防することを目的として、25歳まで滞在できる自立支援ホームでは、私的寄付金に加え市と州の児童福祉局とホームレス局の予算を組み合わせてプログラムを運営していた。入所者は週 20 時間の施設外労働とサービス料金の 3 割負担を約束する代わりに、修学・進学・就職支援を中心にケースワーカーや生活スキルカウンセラーとの定期的面接、心理療法士によるカウンセリングなどが受けられる。退所後は、社会の第一線で活躍する社会人ボランティアが、メンターとなって退所者を永続的に支援し続けていた。

#### 【おわりに】

今回の研究に協力してくれた女性はいずれも研究の目的を理解し、生い立ち語ることを了承してくれた時点で、過去の体験に自覚的で比較的落ち着いた自己観を確立できている人びとであった。全くのストレンジャーである研究者に心を開いてくれたのは、既に信頼関係のある誰かの紹介であったことや、彼女らが現在の生活にそれなりの生きがいを見出し自立した生活を送ることができている現実があるからだろう。よって本研究の限界は、対象者の偏りとサンプル数の少なさであり、児童養護施設を退所した女性の全体像を捉えるためには、今後さらなる調査が必要である。また、児童養護施設での生活が母性意識の形成にどう影響したかについては、今回の研究では十分に検証できなかった。

本研究のインタビューの語りとその分析を通じて、被虐待体験のある女性の母性理念は、子ども時代の喪失やトラウマ体験を修復したいという希望、理想的家族像への憧れ、両親の失敗は繰り返さないという決意であることが分かった。対極に位置する不安は母親自覚に関するもので、喪失・トラウマ体験、不安定な自己観、虐待者との同一視に起因するものである。児童虐待を受けた女性は、両極に位置する母性理念と母親自覚への不安の間を行きつ戻りつしながら、母性意識を形成していることがうかがえた。揺れ動くプロセスで母性意識を促進する要因として、肯定的ロールモデルの獲得、新しいアイ

デンティティの確立、支援者とのつながり、肯定的自己観が挙げられた。

女性にとって、子を産むか否かの答えは一つであることも、正誤や優劣があることでもない。しかし、今回の調査では児童虐待を受けた女性にとっての母性意識の形成のために、継続したメンタルヘルスや対人関係支援の必要性と重要性が浮き彫りになった。その支援は退所後数年の女性に限定した支援ではなく、より長期的に継続する支援でなくてはならない。

#### 【引用文献】

大日向雅美 (1990) 母性の研究 川島書店  
花沢成一 (2005) 母性心理学 医学書院